

私が所属していた吉本新喜劇ではキャラづけができていればいほど笑いを取りやすい環境でした。その理由はこうです。芸人としてのキャラクターがあれば、お客さんが「親近感」を持ちます。そして、芸人が「芸を見せる」と発信するだけではなく、受け取り側のお客さんの方からも「芸を見たい」という思いが生まれ、双方向性のあるコミュニケーションにより笑いが取りやすい土壌になります。

⑤ キャラづけ



大阪成蹊大准教授 福岡亮治

教育の世界でも同様のことが言えます。今回は芸人を辞め、京都市立小学校で教員になった時のエピソードからお笑いとお笑いの教育のつながりについて語ります。



新年度に子どもたちは「新しい先生ってどんな人だろう」と教師から一歩離れて観察します。「先生！先生！」と話し掛けてくる子どもは、話せば話せば「親近感」

を持つてくれます。しかし、一歩離れたままの子どもとの距離はこちから話し掛けないと縮まりません。全員と話をするには、たくさん時間を要します。だから「話し掛ける」ではなく、「話したい」という環境づくりが大切になってきます。



その環境づくりの方法の一つとして教師のキャラクターづけがあ

ります。私は、新学期の子どもとの出会いの中で自己紹介の時に「先生はシマシマが大好きです。いつも体のどこかにシマシマがあります。探してみてください」と言っていました。出会いの日は靴下、シャツ、上着、ハンカチ、靴

など身に着けるものすべてをシマシマづくめで教壇に立ちます。そのうする中で毎日、子どもたちは「今日は先生のどこにシマシマがあるのだろう」と注目し、休み時間などは「先生、シマシマ見つけ

たよ」とたくさん子どもたちが話し掛けてくれました。

キャラづけをすることで子どもたちから話し掛けるきっかけが生まれ、そこからコミュニケーションが始まります。教師が「伝えたい」と一方的に発信するだけでなく、子どもたちが「先生の話を聞きたい」と意欲的に授業を受ける環境が出来上がりました。



これは育児でも同じです。子どもたちに何かを伝えたい時は、子どもに押し付けにならないように

子どもが興味を持つことができるような環境づくりが大切です。例えば、本に興味を持たせたいなら「読みなさい」と言うのではなく、「読みなさい」と読む本を「何を読んでいますか？」と話し掛けられる環境をつくりたい。とにかく、何か珍しいことをしてみたい「何をしたいの？」と聞かれたら「うちのものは？」と聞かれたら「何を話していい状態ですか、語ること子どもと向き合うことができるので、子どもたちに伝えたいことがある時は、話し掛けるだけでなく、話し掛けられる環境をつくるのが大切です。

毎月第1土曜掲載です

「話したい」と思うきっかけに